

Title	ネルヴァルの「幻想」に関する動性(ダイナミスム) (その一) : IllusionからInlusioへの劇
Sub Title	Dynamism in Nerval's fantasy (1)
Author	井田, 三夫(Ida, Mitsuo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1970
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.28, (1970. 2) ,p.66- 89
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00280001-0066

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ネルヴァルの「幻想」に関する動性（その一）

デイナミスム

— Illusion から Inusio への劇 —

井 田 三 夫

『ドルブルーズ覓え書』の中に次の言葉が見える。

「私は神に対して、諸々の事件は何も変えて欲しいとは望まない。ただ物事に対する私の関係の仕方を変えて欲しい。そして私の
こうした考え方を神が認めてくれることを願う。要するに私の周囲にある種の魔術的世界を創造し、そうした世界のイリュージョ
ンを私がしかと感じられるようにしてくれることを神に願う。」⁽¹⁾

この言葉にネルヴァルの精神の在り方が端的に表現されているように思われる。すなわち、一般に後期のネルヴァルを特徴づけてい
るといわれる夢や幻想への傾斜(Ⅰ)、あるいは世界が変わるとすれば自己が変わることである、という認識論上の自覚(Ⅱ)、それらが
この言葉の中に認められることである。しかも同観え書がかかけたのはジャン・リッシェの推定によれば、『幻想詩篇』や『オーレリ
ア』といった神秘主義的傾向の著しい晩年の作品に二十年も先立つ時期、すなわち一八三〇年代であるという事実、われわれはこの事
実にあらためて驚かされるのである。

ところで本稿においては主として(Ⅰ)の問題を取り上げることとなる。すなわちネルヴァル文学のもつ幻想性ないし「幻想体」的
構造性の意味するものを「演ずる」Jouer という概念に従って少しく検討してみたい。その場合、詳説する余裕はないが、ネルヴァル

にあつては「色褪せた散文的」現実に対する Désillusion→Illusion (類像的なもの、いぶほくの信頼)→Inlusio (救済幻想に基いてく幸福感)→Illusion(やの Inlusio の虚構性への覚醒及び狂気による幻覚)→Désillusion (現実への回帰及び最終的には創作力の涸竭か死くる絶望)といった円環的な「幻想に関する動性」^(アナロギ)が認められるのであるが、本稿ではそのうち Illusion から Inlusio への変容というプロセスのみを取り上げることとなる。

一

唐突だが、ネルヴァルの作品には「・リッシュ⁽³⁾等のふく、いわゆる Double のテーマが数多く見い出される。通例「分身」あるいは「副身」と訳されるるネルヴァル研究用語としての double とは彼の作品の中に描かれている互に似かよつた一人の登場人物が対立的に分裂したネルヴァルの意識、人格を反映して、共有し合つてゐることをさすが、その例としてはたとえば『レ・ディリュシネ』といふ作品の一部『ビセートル王』における王ヒラウル・スピファース、『東邦紀行』の一部、『カリフ・アケム物語』におけるアケムとヨバースなどがあげられるが、私がこゝで特に注目したいのは『オーレコア』といふ小説の中に描かれてゐるdoubleである。理由は『オーレコア』における double が語り手「私」との関係で現われているからであり、おなにはそれがネルヴァル用語としての Double (分身) としての意味にじぶんみや、より近代的意味合いで、所謂自我(ないし意識)の二重性 dualité による性格をも備えているからやね。

Je vous ai raconté mes angoisses avec le sourire sur les lèvres, de peur de vous effrayer: je vous ai dit avec calme des choses dont vous n'avez pas frémi et qui tenaient tellement au cœur qu'il me semblait que j'en arrachais des fibres en vous parlant. Il semblait que je fisse pour ainsi dire l'analyse et la critique de mes émotions les plus chères, il semblait que je parlais d'un autre.

語でいる「私」と体験し感じてゐる「私」のいはした距だら。あくは表現された「私」と生きられた持続⁽¹⁾の「私」との落差。ネルヴァーの「」⁽²⁾した意識の「重性」は『ホーリック』⁽³⁾ 「Double < & hantise」⁽⁴⁾ に現れる。

Mais quel était donc cet esprit qui était moi et en dehors de moi. Était-ce le *Double* des légendes ou ce frère mystique que les Orientaux appellent *Ferouer*?—N'avais-je pas frappé de l'histoire de ce chevalier qui combattit toute une nuit dans une forêt contre un inconnu qui était lui-même?

「」⁽⁵⁾ ネルヴァーは「」⁽⁶⁾ 「」⁽⁷⁾ l'autre やなみ「」⁽⁸⁾ 人の自分 l'autre moi や現るに現るの自分 いふる。ネルヴァーは「」⁽⁹⁾ 救済の基礎となる筆の自身の identité やねば自己の「最自」的な在り方を求めるが、現実には常に自己自身でありしかも自分にとって「他人」l'autre や現るに現るの自分しか見出せないふうである。そこは見い出せる自己が、「永遠に変わらぬ眞実の自己」⁽¹⁰⁾ seul moi véritable やはるの違うところ (autre) と感じてやがるからである。J.-P.・リシヤール やシヤン・ラ・リッシュの指摘する通り⁽¹¹⁾、これは彼の意識主体としての自己 Moi が自己の double やなみ l'autre moi や衝突 conflict を起すや契機が内包されてしまうのは次のようだと思われる。

Il y a en tout homme un spectateur et un acteur, celui qui parle et celui qui répond. Les Orientaux ont vu là deux ennemis: le bon et le mauvais génie. «Suis-je le bon? suis-je le mauvais? me disais-je. En tous cas, l'autre m'est hostile...»

ネルヴァーがこのようないわめて倫理的な方にいたわるのは彼が救済の前提と見做す自己純粹化⁽¹²⁾という固定概念にとりつかれていたからなのであるが、それなしもあれネルヴァーは間違ひである。自分とうへんのが double (二つに分かれらる) や感ずるが真的自己、「善なる自己」は一体じやかであるのか。それは「」⁽¹³⁾ 一人の自分 l'autre を意識してゐるの私自身 Moi なのか、それとも前者 l'autre moi なのか。決着は容易にわかるだら。J.-P.・リシヤールはこの選択を自分の死(自殺)をもつて行つたといふ。すなはち自己の救済を保證された眞の自己、彼のいう「良い自我」を決定的に解放するためだ、そうした「悪い自

我」や罪に汚れた者としての自分を滅ぼしてしまった、としている。果してそうか。私は一つの“試み”として、ネルヴァルのこの種の「自我の分裂」dédoublement du soi という問題を彼らとは別様な角度から検討してみたい。「同一化作用」Identification’ないし「演ずる」Jouer という概念がそれである。

すなわち、ネルヴァルは自己の内部に絶えず現われてゐる（意識される）その「もう一人の者」l'autre を由意識としての「自分」l'autre moi と考えることをやめ、それを一個の「他人」un autre として考えてくる。いいかえるなら彼の double たゞ「もう一人の自分」l'autre moi をある他人 un autre に同一化 identifier 」、せりに成立する「自己=他人」un autre-moi を意識主体としての「私」Moi があたかも由己のもの、眞の自己であるかのように演じて jouer するべくするのである。ネルヴァルはいうした Identification と「演ずる」Jouer を通して彼を苦しめてやまない自我の分裂という事態を止揚してしまったように思われる。

(二)

ネルヴァルはボームホールがそうであつたように⁽¹³⁾「変装」désguisement とよういふが大好きである。彼の作品の中にはしばしば現われてくる子供時代の「結婚式遊び」mariage fictif というムームーなどの一つのあらわれである。

「私はファンショットに夢中になつた。そして祖先の儀式に従つて彼女と結婚しようという奇妙な考えを抱いた。私は祖母の古い衣裳を肩にかけて、式をとり行ないながら自分でこの結婚を祝つた。〔…〕私は祖先たちの神と私がその聖像をもつていた聖母マリアとを証人に立てた。どやかの子供らしい無邪氣な遊戯に喜んで立ち会つてくれた。」

りかしたエピソードはネルヴァルがどんなに déguiser し、それを jouer しようとする激しい好みgoût を、わいはいわばむうじゅう obsession じじうつかれていたかを物語つている。

あるいは、『ナルヴァ』や『ファイヨール侯爵』などとも見えたかった「結婚式遊び」とようのムームー！」という「私」としてのネル

ヴァルは何に対しても自己を同一化しているかといえば、それはたとえば「狩獵番人の婚礼衣裳」を身につけた叔父の「十八世紀風の花嫁」⁽¹⁶⁾に對してであり、こうした作品を書いている作者ネルヴァルにあつては子供時代の自己に對してである。ここでは後者の問題には触れない。さしあたり問題なのは象徴的意義を帶びたこの種のエピソードそれ自身に認められる演技性、同一化作用である。ネルヴァルはこうして花婿に完全に自己を同一化し、「自己即花婿」としての un autre-moi を演ずるのである。

ネルヴァルのこうした自己を自己以外のものに変装し、それを演じようとする精神の在り方が反映されているのは先に述べた mariage fictif のみではない。仮面舞踏会、⁽¹⁷⁾ まことに祝祭 fêtes⁽¹⁸⁾ あるいは宗教的儀式といったもの、さらには文字通り、déguiser⁽¹⁹⁾ jouer するものとしての芝居 théâtre⁽²⁰⁾ などに對する彼の異常な関心⁽²¹⁾ 愛着もまたそうした意識のあらわれであるようと思われる。

仮装ないし仮面舞踏会についての描写や言及はたとえば『ローレリ』⁽²²⁾ 第四章、『シルヴィ』⁽²³⁾ 第十章『グラン・フリゼ』⁽²⁴⁾『東方紀行』序文第八章などに見られる。

次に祭り、祝祭に関する描写ないし言及にいたっては數え上げられぬ程、沢山見い出される⁽²⁵⁾。その代表的なものとしては『シルヴィ』⁽²⁶⁾ に繰り返し述べられているヴァロア地方の村々の鎮守祭 fête patronale⁽²⁷⁾ であり、殊にその「花束祭り」fête du Bouquet⁽²⁸⁾ などがあげられよう。「それは長い間忘れられていた田舎の想い出、幼い日の素朴な祭りの遠いこだまだった。一角笛と太鼓が遠くから村々に響きわたり、若い娘たちは花飾りを編み、唄をうたしながらリボンで飾った花束を調える。雄牛たちの引く重々しい花車が通る道々でそれらの贈り物を受け取っていく。そしてそのあたりの子供の私たちは自分の弓と矢をたずさえ、騎士の身ごしらえで行列を作るのだ。」だが当時は知るよしもなかつたのである、そうして自分たちが年々くり返しているのがほかでもない、数々の專制政治や新しい宗教の亡びたあとまでも生きのこつてきたドリュイド教の祭式だったとは。」ネルヴァルは祭り、ことに村の祭りが生み出す共同幻想性に「あたかももし・レヴィ・リブリュールのいう未聞人における「集團表象」représentation collective⁽²⁹⁾ に似た無意識的な、だが恐いまでに強力な(祭りという)幻想体のもつ魔力、暗示力に一すんで幻惑されてしまうのである。祭りの日に行われる各種の祭式や催し、たとえば仮装した子供たちの騎士行列⁽²⁵⁾、巨大な花束の、神々の祭壇への奉獻式⁽²⁶⁾、夜の明けるまで開かれている踊り

(27) そうしたものがもつ幻想体の魔力に憑かれてしまふのである。そのよくなある他者 *un autre* 三四〇を同一化 *identifica-*
tion し、そこに成立する *un autre-moi* を全的に生き、演ずるのである。そうするといふによつて自我の分裂という事態が一時的であ
れ、消滅し、自己と世界との一体感を得る。ないしは得たという幻想を得る。

ネルヴァルのこらした精神の在り方は宗教的儀式についても事情はまったく同様である。たゞえはサン・テチエヌ教会、その莊嚴
やわん然と輝いている堂内で、「礼拝の盛儀」*la pompe théâtrale de l'office* は闇やゝ熱いほし描写、等々。

最後に彼の演劇への関心があるが、これは彼の実人生においても、女優ジョリー・ロロンとの関係から大きな意味をもつており、そ
のためこれまで多くのネルヴァリアン(28)によつてとり上げられてきた問題だが、いのち本題の性質上、その本質的な側面、すなわちネ
ルヴァルという人とその作品のもう演劇性 *théâtralité* なし精神の演技性もろゝた問題のみを取り上げていくこととした。

ネルヴァルの作品にはすでにとり上げた「結婚式遊ぶ」*mariage fictif* や「ロンド遊ぶ」(29)とともに「お芝居遊ぶ」*jeu de théâtre* の
ヒュッフェー、あるいは仮面劇や神秘劇に関する言及がしづしづ見出される。たゞえは『散歩と回想』では

Ce fut lui qui m'enseigna l'art dramatique; nous représentions ensemble des petite comédies qu'ils improvisait avec
esprit とか『ナルヴァ』第六章「ホチキ」では

..penser aux fées des Funambules qui cachent, sous leur masque ride, un visage attrayant, qu'elles révèlent aux
dénoûment, lorsqu'apparaît le temple de l'Amour et son soleil tournant qui rayonne de feux magiques
(30)

などと見える。こらした例からわれわれはネルヴァルが仮装し、演ずるに異常な関心を持つてゐるといふことが理解できる。こ
の点で『東方紀行』の次のいとはばは恐らく決定的な意味を持つてゐる。「私は自分の人生を一つの小説として送りたいのです。そして
どんないふなじめでも自分の周囲にユーハ、運命の結び目、好奇心、一話やいえはアクションを創造したい」と望んでゐる、こうした積
極的で、毅然とした小説中の主人公たちが遭遇する状況 situation の中に好んで自らを位置づけるのです。」自己の生活なし人生を
一篇のロマンのように生きる、とはどういふことか。それは恐らく、小説中の主人公に自分をすつかり同一化し、それをあたかも眞の

自己であるかのように「演ずる」ということに違ひない。いには「小説中の主人公即自己」、「自己即小説中の主人公」(un autre-moi) という奇妙な矛盾式が成立している。ネルヴァルはそういう一見不合理な矛盾体としての un autre-moi を、演じて、いふやうに、
このやである。

「…そうです、その晩から私の狂氣 folie は自分がローマ人であり、皇帝であると信ずるにしました。私の役が私そのものと一緒に
なってしまいました。そしてネロの胴衣 tunique は私の四肢にべつたりとくつき、身体を燃え上がらせました。⁽³⁴⁾」
こうして彼はある他者 un autre の中につかり没入してしまい、その中にあって un autre-moi を実現するのである。したがつ
て、いには double 意識、自分がもう一人いるといった意識は消滅している。ネルヴァルはこの種の un autre(いの場合、ネロ)を
演じつくすことによって、かえって自己そのものを獲得するのであり、いわば自己の存在確証を得るのである。少なくともネルヴァル
にとってはそのように思われる所以である。次の一文もわれわれにこのことを確認させてくれる。

「御存知の通り、自分が想像した人物とすっかり同一化 identifie しなければ何も作り出せない物語作者がおります。」⁽³⁵⁾

ところで彼は自分がネロとなり、ネロが自分であると本当にそう思うのであらうか。そうだとすれば文字通りの folie であろう。私
としては彼はほとんど眞面目にそう思うのであり、自らすんでそう「思い込む」のだとみた。『火の娘』序文や『シルヴィ』といつ
た作品からうかがわれるいとは主人公「私」の背後にかくれている作者としてのネルヴァルはそのことの非現実性を気づいている、と
いうことである。Identification という自己欺瞞、そういうて悪ければ「自己暗示」、それはネルヴァルにとって親しいものである。と
ころでここにいう「信じ込む」とはサルトルが『想像界』において述べている様な意味、すなわち「全的に非現実様式にもとづいて生
きる」⁽³⁷⁾ という風に理解して一向に不都合はないのであるが、私はネルヴァルにあってはもう少し強い意味があるようと思われる。す
なわち、ネルヴァルの場合、「これは虚構なのだ」という意識が文字通り消えてしまうことはないにしても、『未開人の心性』などの中
でレヴィ・ブリュルが問題にしている意味、あるいは『ホモ・ルーテンス』の中でホイジングガーが次のように語る場合の意味をも決して
失っていないのである。

「未開人は存在と遊戯を区別できない。つまりその存在であることと、その存在を演ずる」ととの間に何んら概念上の差別を知らない。〈同一化〉とか〈イメージ〉、〈象徴〉ということを彼は何一つ知りはしない。したがってわれわれがここで遊戯する（演ずる）〉という普通のことばに強くこだわることで、祭儀を営んでいる時の未開人の精神状態を最もよく会得する」ことができるか、どうかこれは解ききれない疑問として残らざるを得ない。われわれの理解する遊戯 play という概念の中では本当に信じていることと、信じているように見せかけることとの間の区別が消えてしまうのだ。⁽³³⁾」

ネルヴァルは存在 *Etre* と信念 *Goyance* の区別を決して知らない誤ではなく、その意味で彼を未開人と同一の次元で論ずるのはいささか暴論のようにも見える。だが、それでもかかわらずネルヴァルの場合、*identification* といふ、*jouer* といい、その渦中にあっては存在 *Etre* と演技 *Paraitre* との間の区別が一時的であれ消えてしまふ（知らないのではない）といふことが起こるのである。「まあ、私は自分がそんな恋人であり、そのような病人であると思つている（にすぎない）のではなかろうか」、でも私は自分がそうであると思えば、実際そうなのです。⁽⁴⁰⁾」こうした存在 *Etre* と信念 *Croyance* との混同は彼の病氣（精神病）によって起ころとも、あるいは多くの評者がそう理解している如く、彼のオキュルティズム、神秘的ピタゴリズム信仰のために生ずるともいえようが、私には必ずしもそらは思われない。全的に「演ずる」ということの極限には正常な精神（状態）にあっても、そのような区別を消滅させる微妙な領域があり得るのである。だがこのことはさして問題ではない。問題はそのように自己を他者 *un autre* の中に没入させることによつて、彼は自己意識としての自己と他者との統一体たる者 *un autre-moi* と化してゐるといふこと、そらすることによつて少なくともそれを演じて（同一化して）いる間は自我の分裂 *dédoublement du soi* といつた事態を完全といえるまでに止揚しているといふことである。こうしてネルヴァルは自己の内部に *Moi* と敵対するものとしての彼の *double*、すなわち「もう一人の自分」*l'autre moi* を意識することなく、他者即自己、自己即他者という一者存在所有の幻想 *illusion* に満たされることとなる。ところでいふの *“illusion”* という言葉は語源的にはラテン語の “Inlusio” である。そしていの “inlusio” とはホイジンガーによれば *in-lusio* (\leftrightarrow *in-ludo*)、英語の *in-play* (遊びの状態で) であり、これは *harmonie* なし平衡といういふを意味する。フランス語においても機械用語として

jeu という言葉に（機械の）遊び、すなわち（活動の）自由、といった意味が残っているが、そのような自由、バランスを得た天秤のめぐら自由な状態、それが “inlusio” の意味である。

ネルヴァルは *un autre-moi* を演ずる」とによって、右に述べた意味での〈幻想〉を、すなわち存在への〈即融幻想〉 *Inlusio de l'assimilation* を得るのであり、心理的には精神の〈内的平衡感〉 *Inlusio intérieure* といったものを得るにいたるのである。ところで、精神の「自由な状態」とい、「内的平衡感」とい、それらは演じてはいる限りにおいてのみ成立し得るものであることは、いふまでもない。厳密にいうなら、それらは作品—*un autre-moi* が実現し得る殆んど唯一の場—を書く、というプロセスの外には成立しがたい心的状態なのである。」の意味でそうした内的 *Inlusio* とは演ずる、という行為の外から眺めた場合、*Illusion* 存在となつており、他方、その *Illusion* は演ずるといふとそれ自体から眺めた場合、*Inlusio* 存在として成立している、といふよう。

J-P・リシャールはネルヴァルのこうした *un autre* (引用した例では『火の娘』序文中の皇帝ネロ) への全的な没入、それへの cohéſion といふ現象をそれが彼の *folie* の一因である、と消極的に解釈しているが、私にはそう思われない。ネルヴァルのこうした現象は上に述べてきたような積極的な意義を担つて、いるように思われる。

ネルヴァルは変装 *déguiser* 、演ずる *jouer* との裡に、そのような精神のドラマを実現させていたように思われる。

(II)

ネルヴァルにこうして、「書く」ことによる *Écriture*、それもまた「演ずる」ととに他ならなかつた。すなわち彼にとって作品を書くことは、彼の悲哀、苦悩、現在であれ、過去であれ、自己の人生を何らかの意味や「演ずる」とことであった。そしてこの場合、「演ずる」とは「かわる」ことであつた。「かわる」には仮装する *déguiser* することであり、これは汚れたもの、悲惨なものー存在の苦

惱一を慈しむことであり、それらを意味づけることであった。いいかえればそれらをより美しい、より莊厳に、より真実らしくいくつくり直す」と *récréation* であった。悲哀存在としての「この世」なるものの一切を自己の夢 *rêves* や幻想 *illusions* やかり、莊嚴化してらべ、とらへる。ここからネルヴァルのことば（文学）への志向がはじまる。

……それにしても「かざる」とは「一体どうしよう」とであろうか。「かざる」とは美しくないものをたんに美しく見せようとするのと、だけを意味するのだろうか。「かざる」とは「現実逃避」という茶番の自己欺瞞の別名にすぎないのであろうか。だがネル・アベルにおける「かざる」というあたり方がたんにそれだけを意味するのだとすれば、このことはをどのように理解したらいいのだろうか。Les frères

de Jésus-Christ l'ont condamné à mort—*Ses apôtres l'ont renié; aucun ne s'est fait tuer pour lui...qu'après.*—Ils doutaient tous. リリには汚れきつたる、かなわぬ信ひなども信じ得ないものな。それでもだお信じらるべくする者のあらあらの魂の苦絶、

わば復活以前のキリストの原体験といったものにかぎりなく迫ろうとする者のこゝが聞かれる。そのように信じ得ないものを信じ得えないものとしてどこまでもつきつめたもののみが、この「かざる」ということの眞の意味を、「かりに意味づける」ということの眞の意義を知つてゐるようと思われる。なぜなら、「眞」(そのもの)というあり方は「如」(じとく)というあり方を通してしか得られないものであり、その場合「かりに」とはもはや文字通りそうであることをやめ、「眞に」というあり方とほとんど同義であることをその人はよく知つてゐるからである。このことを知つたときから、かざるうとする意志、すなわち「莊厳化への意志」がはじまる。自己のみでなく世界すら、ますます美しく、ますます莊厳にみせようとする、この世界(自己)装飾化、莊厳化への意志、倫理的にいいかえるなら、かりに意味づけようとする意志、それが一般にいわれるネルヴァルの夢 *rêves* なるもの、幻想的 *fantasque* なるもの、あるいは神秘的 *mystique* なものへの異常なまでの愛着 *goût* にかくされている内的意義に他ならない。

ネルヴァルの精神のこうした傾向、汚れ（苦惱）をかぎり（意味づけ）、そのかぎられた美しい世界、それのみを生き、演じようとす
る傾向、それはたとえば次のようなことばに認められる。

Le riche peut garder longtemps la fraîcheur de ses illusions, comme ces primeurs et ces fleurs rares qu'on obtient

cherement au milieu de l'hiver; mais le pauvre est bien forcé de subir enfin la triste réalité que l'imagination avait dissimile longtemps (46) ネルヴァルは「悲しき現実」la triste réalité を夢や幻想、じいに彼の まへ 「想像力」l'imagination とすへ 「忘れやべ」ふすめのである。

「今田はもう一度、人生（現実）を忘れよべ。」Oublions la vie encore aujourd'hui.

「うるさいだらけが正に夢 rêves と幻影 illusion の国（オーリハム）の姿だ。」いじりで隠されたりの場合、「忘れる」とは汚れ、すなわち現実の苦惱を「慈しむ」いふ。すなわち「かめる」いふやうのうちに含まれる幻想の魔力にいつまでも酔つていたいのである。せうして悪ければ、それがやられた在り方を楽しみ、演じてよがるのである (Laissez-moi mon illusion)。

「うるさいだらけが正に夢 rêves と幻影 illusion の国（オーリハム）の姿だ。」いじりで隠されたりの場合、「忘れる」とは汚れ、すなわち現実の苦惱を「慈しむ」いふ。すなわち「かめる」いふやうめす。だから人々はそりにふりぬけアルム、愛、青春、美なるものの何かしらを垣間見ることができる。」

ネルヴァルのこうした「かく」かわらうとするといふ興味、それは彼の〈莊厳化〉の意志〉といふ精神の在り方と深く係わり合っているものなのである。

ネルヴァルの夢や幻想の問題はすでに多くのことが語られてきてるので (47)、いじりでそれが私のテーマに因縁する側面のみを検討するに止めたい。すなわち、この問題を〈書く=演ずる〉といふとの関連から考えていくことにしたい。

ネルヴァルにとって「書く」とはトウヨルバッハ流にふうなる「魔術的な美しい世界」un bel univers magique を再創造 recréation し、それを遊化 récréation する」とであった。

「そしてそこは一つの幻影 illusion、一つの夢 rêve、ある種の輝かしい幻 vision lumineuse がやはり存在するのです。無論それにはヨシジ一がわれわれに創造してくれたといふ魔術的な美しい世界のうちにおいてのみ成立してゐるものではあるが……そぞした魔術的世界にあっては一切が和合し合い、一切が自然の生み出す作品や人間が自然に手を加えてつくり出す作品よりも、より美

しく、より莊嚴で grand あり、より豊かなのである。そして恐らくより真実なのである。⁽⁵²⁾

彼にとてはボエジーが現成させるの「魔術的世界」のほうが所謂日常的な現実世界よりも一層「真実」なのである。こうした考え方は他の作品、たとえば『オーレリア』⁽⁵³⁾や『火の娘』序文⁽⁵⁴⁾、あるいは書簡などにもしばしば見い出されるネルヴァルに親しい思想であるが、この問題はすでに他處で扱つたので、ここで再びとり上げることはすまし。ただ注目すべきことはそれらの例がいずれも plus réel ではなく、plus vrai と表現されてゐるといふのである。そこに夢や想像世界を客観的現実と同一視し、前者をあたかも後者の」とく「演じて」いるのだ、という意識が読みとれるといふのである。

「ふり」で真実なるもの le vrai、それは虚構的なもの le faux である、少なくとも芸術作品やボエジーにあってはそうである。『イーリアス』や『アエネアス』『解放されたエレサレム』あるいは『アントワード』にまざるウソが一体あるだらうか？「…」

それに、と私の裡の批評家がいう、私はこの種のウソ（なるもの）が好きなのだ。⁽⁵⁵⁾

彼にとって「真実なるもの」le vrai はウソの中にしか、すなわち事実 le réel の中にではなく、夢や想像世界の中にしか存在しないのである。それに彼はウソでありながら真実でもあるそういう想像界を演じ、遊化する」と「遊化」とは遊びつつ一個の他者と化することである一を愛するのである。

この場合、「演ずる」とは睡眠時の夢や子供時代に得た幻想 fantaisiesなどを手がかりとして、ウソでありながら真実である世界——の魔術的世界——をますます豊かに「ひらく直す」recréer ほじそれ自体である。すなわち表現行為それ自体である。「子供の頭の中でこのように形成された世界は非常に豊かであり、とても美しいので、人はそうちた世界がその後に得たさまざまな想念 l'idées が誇張された結果でき上がつたものであるのか、それとも以前の生 existence antérieure を想起して生じたものであるのか、さういふには未知なる世界の魔術的現実 géographie magique d'une planète inconnue であるのかわからないくなつてしまふのである。」ネルヴァルの作品に描かれている睡眠時の夢 rêves、狂気にともなう幻覚 hallucinations、あるいは覚醒時の夢想 rêveries ほじつたものの区別が判然としない理由の一つがこゝにある。つまりそれらは表現の過程で「誇張され」exagérés、豊かにされ、再構成されて (Re-

composons nos souvenirs) ⁽¹⁸⁾ いふのである。

ところでネルヴァルは何故これほどまでに夢の世界を生きようとしたのだろうか。自己の人生やこの世なるものの一切をかぎりうとしたのであろうか。理由は彼が「救済コンプレックス」に憑かれていたからである。ネルヴァルは「救済への渴望」⁽¹⁹⁾ désir du salut に身を焼かれながら、己れが「汚れて」scandalise する（信仰への道に躊躇している）故に眞の魂の救済が得られないことを自ら氣づいているのである。そこで彼は汚れたままで、その汚れを、一個の美にいたるまで、換言するなら一個の意味にいたるまで、かさりていく。すなわち正統的な信仰によつて一純粹化への意志によつてではなく、文学（ボエジー）によって一かざらうとする意志、莊嚴化への意志によつて、救済を得ようとする。

ネルヴァルはキリストとともにキリスト以前のキリストの苦惱、復活以前のキリストの苦惱に充分に耐えたろうか。ネルヴァルの文學は「不幸は不幸のままだ」という意識に耐えつづけることの中から生れてきたことはだらうか。そうであるともいえるし、ないともいえる。なぜなら、彼はなるほど「書く」ということを通して実現される幻想世界の裡に自己の不幸や苦惱の意味、それらに耐える力——いわば現実慈悲力とでも呼び得るもの——を求めたことは事実であり、この限りにおいては充分に耐え得なかつたともいい得よう。が他方において、ネルヴァルに認められるそのようながざるうとする意志、かりに意味づけようとする意志、それは「不幸は不幸のままだ」という意識に充分耐え得た人もまた持ちうる訳であり、すでに述べたとおり、その人のみがかかるとこうとの眞の意味を知つてゐる、といふ意味において充分に耐えたといい得よう。

ところで、彼は自己や世界は汚れているのではなく、汚したのだというじみ、この世に不幸はなく不幸の意識があるだけだといふことを知らないではない。知つているにもかかわらず、この「重大な障害」⁽²⁰⁾ barrière grave—汚れ—意識一人間的意味づけーを超える」とができるないのである。ところより、むしろ信じ得ないものを信じ得ないものとしているまでもつきてはしてはいるのである。Il ne faut pas faire si bon marché de la raison humaine, que de croire qu'elle gagne quelque chose à s'humilier tout entière, [……] et quel est le père qui se complairait à voir son fils abdiquer devant lui toute raisonement et toute fierté! リリム

心からもうとする意志、莊嚴化への意志がはじまる。擬信仰、擬意味づけ、擬天国、それらを成立させる場として「ボエジー」(文学)がある。だがこの場合、「擬」という冠辞は、少なくともネルヴァルにとっては殆んど意味をなさない。なぜなら「擬」というとの究極的な在り方は「眞」という在り方にかなり近く近いものであることを彼は知っているからである。心のよみがえりのいにしへの夢の世界、ボエジーの世界を彼は生めるのであり、それらを通しての救済という道を積極的に選ぶことである。

ところで「書く」という行為によって豊かにされる夢の世界、彼のいう「魔術的な美しい世界」un bel univers magique、ネルヴァルがそのような世界のイメージ化にむかとも見事に成功しているのは『オーレリア』最終章に續く『メモラーグス』におけるやう。それ故にこの『メモラーグス』はその表現において、その美しさにおいて、その深めにおいてネルヴァル文学の極北といふよう。それ故にこれは彼の救済の問題ないし自我の分裂 dédoublement du soi いふた問題と関連づけながら、この『メモラーグス』のゆう問題を検討してみよう。

『メモラーグス』はネルヴァル的救済を予感させる、「魔術的な美しい世界」を醸氣する無数のハイムズの構成する。

Sur les montagnes de l'Himalaya une petite fleur est née—Ne m'oubliez pas!—Le regard chatoyant d'une étoile s'est fixé un instant sur elle, et une réponse s'est fait entendre dans un doux langage étranger.—*Mysotis!*

Une perle d'argent brillait dans le sable; une perle d'or étincelait au ciel... Le monde était créé. Chastes amours, divins soupirs! enflammez la sainte montagne... car vous avez des frères dans les vallées et des sœurs timides qui se dérobent au sein des bois!

Bosquets embaumés de Paphos, vous ne valez pas ces retraites où l'on respire à pleins poumons l'air vivifiant de la Patrie.—《Là-haut, sur les montagnes,—le monde y vit content;—le rossignol sauvage—fait mon contentement!⁽³³⁾》一切が交感し合ひ、祝福し合ひ、文字通り存在に対する「ややこしい」と「親しみ」の回復された世界。⁽³⁴⁾ いは通じ、いはせによてのみ実現されたいの「ヤハボー的新鮮物」l'inoui rimbalduen に満ちた世界。ネルヴァルのいふた inconnu なし inoui な現実

感、それが「書く」ことの行為を通してのみ「体験」し得たのである。「書く」いわばはじめて教えた不思議な想像的現実。それは書きながら、じとじと心を求める合い、まわり合ひ、確かめ合ひで田の生れておたりいせの世界なのである。いわばのやうな音楽性、それが「いせがはるかに響き合ひ、照應しながら喚起するあら内在的 immanent な実在感。いわゆる連想想起を通じて現成されたりした不思議な世界はやがてその頂点に達する。

Du sein des ténèbres muettes deux notes ont résonné, l'une grave, l'autre aiguë,—et l'orbe éternel s'est mis à tourner aussitôt. Sois bénie, ô première octave qui commenças l'hymne divin! Du dimanche au dimanche enlace tous les jours dans ton réseau magique. Les monts te chantent aux vallées, les sources aux rivières, les rivières aux fleuves, et les fleuves à l'Océan; l'air vibre, et la lumière brise harmonieusement les fleurs naissantes. Un soupir, un frisson d'amour sort du sein gonflé de la terre, et le cheur des astres se déroule dans l'infini; il sécarte et revient sur lui-même, se resserre et s'épanouit, et sème au loin les germes des créations nouvelles.

いわがこねゆる「無限」神秘的ではあるが同時に限りなく現実的⁽⁵⁾な現実⁽⁶⁾「新し」現実⁽⁷⁾ une réalité nouvelle—ネルヴァルの「第三の生」⁽⁸⁾ une seconde vie あるのマーチー⁽⁹⁾と他ならぬ。やしも、した世界の発見—最初は「の發明 invention」それが彼の夢の探求(それを彼は descente aux enfers と名づけ)の「の意義」であった。アリヤは「主觀的な在り方がある新しい現実の発見と同じ意義をもむ、ある究極的な客觀性」といたるの再び接合して「⁽¹⁰⁾ le subjectivisme équivaut à la découverte d'une réalité nouvelle et rejoint une objectivité supérieure」のである。そして何よりの肝心なりいはじらした「究極的現実」 l'ultime réalité が「いせのもの暗示的な音楽性」⁽¹¹⁾のもののみ、その存在を保証されるのである。いかれるないじらした merveilleux の世界、新しの現実としていたるのいせを通じ、いせの中にのみ成立してしまつてやである。この世界は言語によって成立していせた世界⁽¹²⁾において幻想構造性をもみがれ得ていなしにわかかねむず、その神秘的な言語の暗示力を通じて、いわば一個の「幻想体構造」性を獲得していぬのである。かなわちボリス・ヌ・ハコノラシヨルのいせを借りれば sens ひとつ ultime réalité が forme

としての「いとばそのもの、なほしりとばのもの」音楽性の中に *immanent* と存在していられる。彼がこの『メモラーブル』を〈書き演じ〉ながら、あたかも存在そのものを、あるいは自己の救済そのものから獲得しつつあるよう⁽⁷³⁾に感ずる」とができたのは「のうな理由によるのである。

リシヤールも指摘するように⁽⁷⁴⁾『メモラーブル』における「いとば mots は monovalents であり、アウエルバッハの「トライアティック的、旧約的な問題性、悲劇性、深淵性 Profondeur やシヌムには無縁であり、それは「ただ一つの感情、ただ一つの場面」⁽⁷⁵⁾ un seul sentiment ou un seul spectacle を表現しているだけなのである。もろにそのいとばは「トマ・アンジヨリコの色彩のよう」⁽⁷⁶⁾ 存在の「單一性」unicité を暗示し、意識の「分裂」dédoubllement や潜在意識 arrière-pensée といったものを決して感じさせない。それ故に、じゅうした言語世界に Profondeur やシヌムのがなお感じられるもすれば、それは「水平的に生れる」⁽⁷⁷⁾ nait horizontallement のである。そりにリシヤールの「うランボー的新鮮さや水平的な深さ profondeur horizontale」あるいは A・グギャンの「う新しい現実が感じられるにしても、要するにネルヴァルの」の世界は「言語の表面性の裡」⁽⁷⁸⁾ dans une superficialité du langage、私にいわせれば「言語の人工性の中」dans une artificialité du langage、そういうて悪ければ言語の魔術性の中に成立してくるのである。」⁽⁷⁹⁾ 世界はひきおでじても「いとば」langage 自身のもの体臭をかすかに漂わせている。透明だがある種の匂いを放つことばの粘液につけまれている。すなわちこの世界はどこかにかくされていると思われる」とばのホゾの緒を通して〈主觀性〉に結ばれている。その意味で私には『メモラーブル』の世界はその新鮮さ、透明性などにおいて一見ランボー的でありながら、本質的にはそれとはまつたく異質であるよう⁽⁸⁰⁾に感じられる。両者の詩質はいわば化学でいう「異性体」構造の関係にあるよう⁽⁸¹⁾に思われる。

いうして世界はその絶対的な明澄性のうちに自らと「和解」し、「讃嘆」hymne divine によって贖罪され、祝福されるにいたるのである。そこでは人間も、鳥も花も、山々も、小川も、すべてのものが存在の同一平面、水平的水準 plan horizontal に生起し、互に呼びかけ合い、答え合い、歌い合っているのである。すべてが一つの宇宙的な歌—『メモラーブル』の言語自体がすでにそれを暗示して

いふ一のめの音聽性と運動性によつて存在の單一性 unicité と著性 unité とを実現し、歛び合つてゐるのである。要するにそひではすべての存在がネルヴァル的言語魔術を通して「永遠の現在」(55)の中に、そしてあるは、A・ベキヤンのいう「原初的な完璧性」perfection originelle の裡に生起していふのである。

いふべし、この魔術的な言語世界、そしてそれを支えていふのは、もへ、ひらした單一性や合一性 Unité、あるいは音楽的な調和、それらはこの世界を創造し、演じてゐる作者にして主人公であるネルヴァルの自我の分裂が止揚されつゝあることを、リッシュの(56)いふほによるならネルヴァルの「対立する自我の両半分」deux moitiés antagonistes du moi が「和解」réconciliation しつゝあることを暗示していふように思われる。それらはまた彼が『メモラーブル』という作品を書きながら、ある種の魂の平衡感、淨福感といつたものを所有しつゝあることを象徴的に示してゐるようにも思われる。

このように「書く」とひら行為によつて莊嚴化され(かざらふれ)、書かにされた夢、いいかえれば秩序づけられ、意味づけられた『メモラーブル』における夢 rêves や幻覚 illusions、それはネルヴァルにとへ、もはや單なる rêves や illusions ではなく一個の réalité nouvelle (すなわち彼のふう une seconde vie) やあら、一つの Inlusio (調和、平衡) やもえあり得たのである。この場合 Inlusio ひばだんに『メモラーブル』の世界、それ自身のめの「絶対的な完璧性」(57) や存在の「合」(58) l'Unité とひつたものを意味するだけでなく、ネルヴァルが作者兼主人公「私」として、この世界を「書きり演じ」ながら、所有したと思われるある種の魂の平衡感、淨福感といつたものを含まれる。このよひ Illusion が Inlusio であり得ている時ネルヴァルは「書く」とが「演ずる」とあるとひう経緯を殆んど忘れてゐるのである。「忘れている」ひは「幻想の幻想性」、すなわちその虚構性を意識しない、ということであり、文學(ボヨジー)による救済の幻想 Illusion をほとんど本物と思い込む、とひつてゐるのである。「書く」とひら行為が宗教的な「行」であると思ひ込むことである。汚れ(文學)を清浄(宗教)と思ひ込むことである。ひうしてネルヴァルの文學による一切莊嚴化の試みは完成される。すなわち、書くり演じ、書くりとを通じ、書くりのうちに精神の平衡 Inlusio de l'âme、ひら救済幻想にみみづく淨福感 Euphorie ひらいたもの獲得するひらたるのである。

「莊嚴化」(かわいりふ、演ずる)、假りに意味づける」と)の過程の極限としての、いの *Illusion* から *Inlusio* への変容のドラマ、Paraître (Jouer) から (Pseud-) Etre の変容のドラマ。これがネルヴァルにおける「書く」ことの Écriture の本質的な意味であり、彼の文学の意味に他ならない。

ネルヴァルにとって「書く」とはそれほどまでに重大な意義を一強いていうなら認識論的な意義を一担つていたのである。ネルヴァルが「私は夢を定着させ（作品化し）、その秘密を探そうと決心した」とか「私は自分の夢の意味を探ろうとした」とかいふ、やむには「私は神に諸々の事件を変えることではなく、もの」とに対する私の関係の仕方をえてくれるよう願う。同様に私の周間に私の属する世界を創造する力を、私の永遠の夢を受身ではなく、自ら支配する力を私に残しておいてくれるよう、神に願う。ところで自分が自分が神だということになるか。⁽⁸⁸⁾ という時、それは彼が「書く」ということとそれ自身のもの、こうした力を知っていたのであり、その意味でいにいう「神」Dieu とは「書く」という行為それ自体ですらあり得るのである。すなわち「書く」ということ、それが世界に対する自己の在り方を変容させ得るのであり、たとえば『メモラーブル』において認められるような新しい現実認識を可能にし得るのである。世界に革命があるとすれば、それは自己の内部にしかあり得ない、といふ認識論。Les événements n'existent que par rapport aux âmes ⁽⁸⁹⁾ 世界が変わるとすれば、それに対する自己の在り方、すなわち意識が変革されるとあるといふネルヴァル的認識論。いのよな世界認識を確實に信ずる事ができるのはいの「書く」ということを通してであり、その裡においてなる。それ故ネルヴァルはこの『メモラーブル』の世界を創造し得た人として、いにいう「神」にすら現になり得ているのである。「書く」というが本質的に「かわい」こと(莊嚴化)、すなわち「かりに意味づける」とことであり、この意味において「演ずる」とてあるにしても、そのためにいの Illusion から Inlusio への変容のドラマが変更を受けることはない。なぜならすでに見た通り、「演ずる」との究極的領域にあっては存在と演技との区別が消滅する——あるいはそれが意識されない——ことがあり得たと同じように、「書く」ということもまた、その莊嚴化への意志の極限にあって、いした意識の変容——新しい現実認識——を可能にし得るからである。

- 註一 Jean Richer 著 G. de Nerval, *Le Carnet de Dolbresse*, Paris. Minard, 1959, p. 70.

2^o Ibid, p. 11,

3^o cf. Jean Richer: *Nerval et Ses Fantômes*, dans le *Mercure de France* n° 1054. 1951, pp. 282-301. 4^o 同上 p. 11-25. 5^o pp. 479-480, pp. 509-516, pp. 583-585. 6^o 1945, p. 40, p. 50 など。

7^o *Oeuvres I*, éd. Pléiade, p. 1952, p. 724, *Letters à Jenny Colon*

8^o A. Béguin: *Gérard de Nerval*, éd. José Corti, 1945. p. 50.

9^o *Oeuvres I*, éd. Pléiade, 1952, p. 385 (註) *Oeuvres I*, éd. Plé. 10^o Ibid, p. 385.

10^o オカルト的な倫理的・美学的な純粋性 pureté など、「純粋性 < の如き > 」の如き題を A. Béguin (*Gérard de Nerval*, José Corti, 1945) Jean Richer (*Nerval et ses Fantômes*, dans le *Mercure de France*, n° 1054, 1951), 11^o 12^o Pierre Schneider (*Nerval ou le Devoir de Pureté*, dans le *Mercure de France*, dec. 1949) が取る上に、が、私の知る限りの問題に関する本格的な研究論文はまだ現われてゐない。この倫理的側面に関するのみならず、これは要するに「漠然たる罪の意識」(J. Richer) に基づく、自己及び自己の存在 existence の宗教的に清浄化 Purification による精神の救済を得たものである所の精神傾向を示す。これは Bachelard 指した「心の精神的・倫理的・宗教的欲求」(A. Béguin) によるが、これは「純粋一無所有」とか「Complexe de Pureté」等の如く然る如きの如き。

11^o Jean Richer: *Nerval et Ses Fantômes*, dans le *Mercure de France*, n° 1054, 1951, pp. 291-292, p. 300; J.-P. Richard: *Poésie et Profondeur*, éd. du Seuil, 1955, p. 62.

12' J.-P. Sartre: *Baudelaire*, éd. Gallimard, 1949, pp. 179-183.

13' *Oeuvres I*, éd. Plé, P. 1196, notes de *Sylvie* par Jean Richer.

14' Ibid., p. 160.

15' Ibid., p. 280.

16' Ibid., p. 280.

17' Ibid., p. 280.

18' *Oeuvres II*, éd. Plé, p. 762.

19' *Oeuvres I*, éd. Plé, p. 288.

20' ② *Voyage en Orient* に於ける *Oeuvres II*, pp. 44, 45, 98, 300, 309 等を参照。 *Les Nuits de Ramazan* 第二章 Théâtre et Fêtes, ibid. pp. 469-498, 第三章 第二節 Fêtes du Sérai, ibid. pp. 617-619 etc. ③ *Notes de Voyage* に於ける ibid. p. 892, etc. ④ *Lorédy* に於ける *Fêtes de Hollande* の特徴、第2章 ibid. pp. 839-943, および *Fêtes de Weimar* 第二章 ibid. pp. 788-791. ⑤ *Pro menades et Souvenirs* に於ける *Oeuvres I*, p. 150.

21' *Oeuvres I*, éd. Plé, p. 268.

22' Ibid., p. 286.

23' Ibid., p. 268.

24' ル・ヴァン・ダムの「未開社会に於ける「集團表象」représentation collective 」によれば、「それが知覚された事物の了解作用・compréhension が成立しないようだ。」この個々體へ集團的な心的規制力、「秘教的な魔力」puissance occulte をもつ。参考として *Les Fonctions Mentales dans les sociétés inférieures*, éd. Félix Alcan, 1928 の第一章「未開人の知覚作用における集團表象及びその神秘的性格」を参照。

25' *Oeuvres I*, éd. Plé, p. 268.

26' Ibid., p. 273.

27' Ibid., p. 283.

28' *Oeuvres II*, éd. Plé., p. 45. 宗教的儀式に関する描写や話題は他にも多くある。Ibid., pp. 149-150, 309; *Oeuvres I*, éd. Plé., pp. 317-328.

29' cf. ⊖Jean Richer: *Gérard de Nerval*, éd. Seghers, 1965, pp. 30-38, ⊖Léon Cellier; *Gérard de Nerval*, éd. Hatier, 1963, pp. 67-82. ④ロマン主義の「夢」の問題を扱った著書として A. Marie: *Gérard de Nerval, le poète et l'homme*, éd. Hachette, 1955, pp. 109-179.

30' ①◎ Ronde たゞ一 cercle de ronde (歌ながら輪になつて睡る遊び) はネルヴァトルにおける特別の意味—「ヨーロッパ天国」ヨーロッパの夢—子供時代、しばしば特權的情態を象徴的に喚起するものとしての意味—おもいへん cf. J.-P. Richard: *Poésie et Profondeur*, pp. 67-77 がより遊遊び『シルク』(*Oeuvres I*, éd. Plé., pp. 268-269) 及び『トーラス』Ibid., pp. 215-216) だらりと描かれてる。

31' *Oeuvres I*, éd. Plé., p. 161.

32' Ibid., pp. 278-279.

33' *Oeuvres II*, éd. Plé., p. 338.

34' *Oeuvres I*, éd. Plé., p. 180.

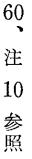
35' Ibid., p. 174. 田舎者風の言葉。《Hé bien, comprenez-vous que l'entraînement d'un récit puisse produire un effet semblable ; que l'on arrive pour ainsi dire à s'incarner dans le héros de son imagination, si bien que sa vie devienne la vôtre et qu'on brûle des flammes factices de ses ambitions et de ses amours !》(Ibid., p. 174).

36' Jean Richer: *Nerval et ses Fantômes*, dans le *Mercure de France*, n° 1054, 1951, p. 291.

37' J.-P. Sartre: *L'Imaginaire* éd. Gallimard, 1940, p. 242.

38' cf. L. Lévy-Bruhl: *La Mentalité Primitive*, ed. Félix Alcan, 1933. ④ロマン主義の「夢」 Les Rêves おもいへん 『L'Indien ne faisait donc pas de différence entre l'acte commis en rêve et l'acte commis en plein jour à l'état de veille : les deux formes d'expérience étaient équivalentes à ses yeux. [...] Ce qu'il a vu en rêve est réel...』(Ibid., pp. 103-105)

- 39, Johan Huizinga: *Homo Ludens*, trans. by Hull, Routledge & Kegan Paul Ltd., London 1949, p. 25.
- 40, *Oeuvres II*, éd. Plé, p. 346.
- 41, Jean-Pierre Richard, op. cit., p. 58.
- 42, ネルガードの精神は謎めくもの神秘主義的、ないし基督教主義的な側面を強調する研究家の多くなりの見解に同意してゐる。たゞ彼はトルヴィーハ・ギヤハ、トゥンハウ・ロベタハ、シムルシ・アーナなど。
- 43, Johan Huizinga, op. cit., p. 11.
- 44, op. cit., pp. 57-58.
- 45, *Oeuvre I*, éd. Plé, p. 431.
- 46, *Oeuvres II*, éd. Plé, p. 1065.
- 47, Ibid., p. 376.
- 48, *Oeuvres I*, éd. Plé, p. 353.
- 49, *Oeuvres II*, éd. Plé, p. 92.
- 50, ネルガードの夢や幻像世界の意義に関する深い洞察を示したのがアルベール・ベギュイ: *Gérard de Nerval*, ed. José Corti, ジョルジ・ポウレ: *Sylvie ou la pensée de Nerval*, dans les trois essais de Mythologie romantique, ed. José Corti, ジョルジ・ポウレ: *Nerval et le cercle onirique*, J.-P. Richard: *Géographie magique de Nerval*, dans *Poésie et Profondeur*, éd. du Seuil より George Poulet: *Nerval et le cercle onirique*, dans les *Cahiers du Sud*, n° 331. 一般的な考察及び source の研究をもつて Jean Richer: *Gérard de Nerval et les doctrines ésotériques*, éd. Griffon d'Or; *Nerval, expérience et création* éd. Hachette がある。
- 51, トム・ハベック『『..』-..』(篠田一平、川村一郎訳、筑摩書房昭和四十一年) 110頁。
- 52, *Oeuvres II*, éd. Plé, p. 744.
- 53, ルルベック *Oeuvres I*, éd. Plé, pp. 367, pp. 375-376, p. 385, etc.
- 54, *Oeuvres I*, p. 173.

- 55' Ibid., p. 864 (Corres. n°85), p. 888 (Corres. n°99), p. 1030 (Corres. n° 257). p. 866 (Corres. n° 86), etc.
- 56' Ibid., p. 133.
- 57' *Oeuvres II*, éd. Plé, p. 19.
- 58' *Oeuvres I*, éd. Plé, p. 131.
- 59' Albert Béguin, op. cit., p. 100.
- 60' 
- 61' Jean Richer; *Nerval et ses Fantômes*, dans le *Mercure de France*, n° p. 1054, 1951, p. 291.
- 62' *Oeuvres I*, éd. Plé, p. 390.
- 63' Ibid., p. 413.
- 64' J.-P. Richard, op. cit., p. 85.
- 65' *Oeuvres I*, p. 414.
- 66' Albert Béguin, op. cit., p. 62.
- 67' Ibid., p. 62.
- 68' *Oeuvres I*, éd. Plé, p. 363.
- 69' A. Béguin, op. cit., p. 36.
- 70' Ibid., p. 62.
- 71' Ibid., p. 62.
- 72' Boris de Schloëzer: *L'Œuvre, L'Auteur et L'Homme*, dans les *Chemins actuels de la critique*, éd. Union générale d'Éditions, 1968. pp. 90-91.
- 73' J.-P. Richard, op. cit., p. 85.
- 74' Ibid., p. 85.
- 75' Ibid., p. 85.

76、Ibid., p. 85.
77、Ibid., p. 85.
78、Ibid., p. 85.
79、A・「キャンはネルヴァニウス・ボーの類似性を両者に共通する『Enfer』の題題から論じてゐるが、私には少なくともその「詩質」より多く長い書いた場合、両者は本質的に異なるべきであると思ふね。両者の異質性という問題は今後の研究課題とした
い。」

- 80、Jean Richer: *Nerval et ses Fantômes*, dans *le Mercure de France*, n° 1054, 1951, p. 291.
81、J.-P. Richard, op. cit., p. 89.
82、op. cit., p. 78.
83、Jean Richer: *Nerval et ses Fantômes*, dans *le Mercure de France*, n° 1054, 1951, p. 291.
84、J.-P. Richard, op. cit., p. 98.
85、Ibid., p. 85.
86、*Œuvres I*, éd. Plé., p. 416.
87、Ibid., p. 116.
88、Ibid. p. 432.
89、J. Richer [著] *Gérard de Nerval, Le Carnet de Dolbresse*, éd. Minard, 1959, pp. 65-66.